

彦根の「みんなの食堂」が、コロナ禍の高齢者や生活保護受給者に弁当配布を開始



食堂で弁当の盛り付けを手分けする地元住民たち

開店1ヶ月で無料の 弁当づくりヘシフト

彦根市の地域循環型食堂「みんなの食堂」は、2020年4月20日から、市内の高齢者や生活保護受給者を対象に無料で配布するためのお弁当づくりを始めた。新型コロナウイルスの影響で、開店から1ヶ月で閉店の危機に陥り、運営方針を変えたためだ。

みんなの食堂のコーディネーター・川崎敦子さんによると、6月30日までの約2ヶ月間、毎日3食分のお弁当を60人分作ったという。お弁当を作ったのは、コロナ禍で職を失った、料理旅館で働く方や舞台の音響設備の技術者、イベント司会者など地域の方々だ。調理に使う食材は、地域の企業や農家、給食センターから寄付されたもののみを使った。「コロナで小中学校が休校した期間は給食センターから、毎日捌ききれないほど大量の食材が食堂に届いた。食品ロスをもったいない。困っている人のために何か作れないかという思いだった」と川崎さんは語る。

食堂で作ったお弁当は、市の社会福祉協議会や生活保護担当の職員に預けて配布してもらう仕組みだ。

食堂とお弁当づくりを 「地域みんなの協力で」両立

「みんなの食堂」はそのシステム上、誰かの参加や支援を原動力に運営されている。卒業論文を書くための大学生や自分の研究を進める大学の研究者など様々な年齢層や職業の人たちが店長となることのできるの

である。もちろん店長の役割だけでなく食品支援を行ってくれる人々も存在するため、多様な地域の人々が関わりあって食堂運営やお弁当づくりを両立しているのだ。

川崎さんによると、「最初は支援の対象としていた高齢者の方々や困窮している若者達もいざ支援を開始すると『自分たちだって誰かの役に立ちたい』という考えを持った人々が多数いたために彼らは積極的に支援する立場に移った」という。

「みんなの食堂」の誰でも協力できるという性質こそが地域間での支援の輪を広げる大きなきっかけになるのではないかとと思う。

市外や県外にも「地域循環型」 の食堂を広げたい！

川崎さんは「『みんなの食堂』を通して地域の人々のつながりを実感した。今後は誰かに焦点をあててあげるのではなく、あくまで食品ロスを0にしていくなかですべての人を横並びと考え、支援されたりしあったりできるような環境を整えたい」と話す。

将来は市・県外にも地域に愛され、人々の拠り所となるような地域循環型の食堂を広げていきたいと考えているという。

食べることと人と関わることを通して心身共に温まれる人が全国に増えることを願う。



食堂の入り口で会話も楽しむ

取材先 NPO法人 芹川の河童 みんなの食堂



2020年3月22日、彦根市・花しょうぶ商店街にオープン。地域の誰もが気軽に訪れるような食堂をめざす。食品ロスをなくすことを目標に掲げており、食材はすべて近隣のスーパーや農家さんからの寄付でまかなう。地域の人々が日替わりで店長を務めて料理をふるまう。

取材者



滋賀県立大学2回生
久木絢加



滋賀大学1回生
古川太陽